

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K12399

研究課題名(和文) 高齢者の潜在する排泄機能に気づく経験を活用した看護・介護職教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of an educational program for nursing and caregiver professionals that utilizes the experience of noticing the latent excretory function of the older adults .

研究代表者

陶山 啓子 (Suyama, Keiko)

愛媛大学・医学系研究科・教授

研究者番号：50214713

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、排泄障害をもつ高齢者を対象として排泄の個別ケアを実践するために必要な知識・態度・信念の向上を目指した教育プログラムの作成とその効果の検証を目的とした。教育プログラムで活用する教材として高齢者排泄ケアマニュアルを作成し、マニュアルを活用した勉強会と継続した事例検討会を含む教育プログラムを作成した。特別養護老人ホームで働く介護職を対象に教育プログラムを実践した結果、排泄ケアに関する知識の向上と定着が確認されたが、排泄ケアに関する態度や信念には変化はみられなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で作成した排泄ケアに関する教育プログラムは、これまで国内では開発されていない高齢者施設等で働く看護・介護職を対象としたもので、従来の画一的な排泄援助から個別ケアへの転換を促進するための一助となる。排泄ケアに関する態度や信念の変化をどのようもたらすかは、今後の課題であるが、実践事例を用いた勉強会や継続的に実施する事例検討会によって知識の向上・定着への効果が検証され、今後の排泄ケアプログラムの確立の方向性を示唆することができた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop and evaluate the effectiveness of an educational program designed to enhance the knowledge, attitudes, and beliefs necessary for providing individualized excretion care to older adults individuals with voiding disorders. A manual on excretion care for the elderly was created as a teaching material for the educational program. The program included study sessions and ongoing case study meetings that utilized the manual. The educational program was implemented for caregivers working in nursing homes for older adults. As a result, an improvement and retention of knowledge related to excretion care were observed, but no changes were noted in attitudes and beliefs regarding excretion care.

研究分野：看護学

キーワード：排泄ケア 高齢者 気づき 教育プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

特別養護老人ホーム(特養)等の高齢者施設で生活する高齢者は、加齢や疾患による心身機能の低下により、排泄に援助を必要とする者が高率である。そのため、少ないスタッフで多くの高齢者の排泄援助をいかに効率的に実施するかが重視されてきた。そして、定時に一斉に行われる排尿誘導やおむつ交換、3日排便がなければ下剤を使用する等のような画一化された援助が実施され、一人ひとりの高齢者が本来もつ排泄機能を発揮する機会が阻害されていたと考える。

近年、こうした高齢者の排泄の問題に対して、排泄日誌による情報収集とアセスメントによって、個別ケアを実施するための援助方法が確立されてきている。しかし、個別ケアを実施するためには、1日何回も繰り返される排泄を援助しながら排泄日誌を記録しアセスメント、そして原因に応じて個別にケアを実施しなければならない。そして、アセスメントに基づく援助が必ずしもすぐに効果を上げるわけではなく、試行錯誤を繰り返すことも必要になる。このような状況において、スタッフの排泄ケアへの負担は高くなり、個別ケアが継続されなくなることも少なくない。これまで一律に援助を行ってきた現状から、個別的な排泄ケアに転換していくためには、直接排泄ケアを実践する看護・介護職を対象としたより有効な教育プログラムの開発が必要である。

看護・介護職を対象とした排泄ケアの教育プログラムに関する海外の研究では、知識の提供のみならず実践の過程での助言が有効である(Rahman et. al, 2012)こと、失禁ケアの実践において看護職は、知識よりも態度が関連(Sunah, 2015)していることが報告されている。そのため、知識だけではなく、困難状況を乗り越え、高齢者の排泄をより快適にしたいという排泄ケアに積極的に取り組める態度を形成する教育プログラムの開発が必要である。基礎的な知識の勉強会に加えて継続的な事例検討会によって、高齢者の排泄状態の改善を経験することができれば、看護・介護職が高齢者の潜在する排泄機能に気づき、個別的な排泄ケアに積極的に取り組む態度の形成につながるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的

- (1) 個別ケアに必要な排泄に関する知識の伝達と高齢者の排泄を改善するための事例検討会を活用した教育プログラムを作成する。
- (2) 特養で働く看護・介護職を対象に作成した教育プログラムを実践し、その前後の対象者の排泄ケアに関する知識・態度・信念を明らかにし、プログラムの効果を検証する。

## 3. 研究の方法

### (1) 教育プログラムの作成

#### 高齢者排泄ケアマニュアルの作成

知識伝達の教材として、高齢者排泄ケアマニュアルを作成した。

高齢者排泄ケアマニュアルは、基礎知識編と事例集で構成した。基礎知識として、個別ケアのためのアセスメントに必要な情報と情報の収集方法、排泄日誌のつけ方や情報の分析方法、アセスメントに基づく援助方法を掲載した。事例集は、頻尿、夜間頻尿、機能性尿失禁、便失禁等の現場で対応が困難な症状を有する高齢者に対する、アセスメント、援助方法の決定、実践した結果とその評価までの一連の過程を掲載した。これらの事例は、研究者らが2005年よりえひめ排泄ケア研究会で実施してきた事例検討会で、課題解決に向けて取り組んだ事例を改変して、基礎知識と関連づけて作成した。

### プログラム構成とスケジュールの作成

- ・事例検討会の対象とする取り組み事例は、教育プログラム参加者自身で決めてもらった。
- ・対象となる高齢者の排泄の課題を解決するために必要な知識提供の勉強会を実施した。勉強会は、高齢者ケアマニュアルを用いて実施した。共通項目として、排泄日誌の記載方法と排尿・排便のアセスメントについて説明したが、取り組み事例のアセスメントに特に必要な内容を強調し、高齢者排泄ケアマニュアルにあげた事例の中で、最も症状が類似した事例のアセスメント、実施、評価の過程を説明した。
- ・事例検討会は、勉強会終了後、月に1回、計3回実施した。
  - 1回目：事例紹介、排泄日誌などを用いて、スタッフから現在の排泄の困りごとやどのような改善を期待しているか説明してもらった。その後、研究者とスタッフが意見交換を行い、今後、どのような対応や情報収集を行っていくかを確認した。
  - 2回目：その後の経過をスタッフより報告してもらい、その結果を踏まえて研究者とスタッフが意見交換を行い、今後、どのような対応や情報収集を行っていくかを確認した。
  - 3回目：2回目と同様
- ・事例検討会が行われている期間中は、1週間に1度電話でフォローし、必要時は対応等の変更を助言した。

- ・1回の勉強会・事例検討会は30分程度とした。

## (2) プログラムの効果の検証

対象者：A 特別養護老人ホーム（以下A 特養）で働く看護職、介護職。A 特養の中で、教育プログラムに参加を希望した2ユニットを対象とし、参加ユニットのスタッフで研究参加に同意の得られた者を対象とした。

### 教育プログラムの実施

参加ユニットごとに、勉強会・事例検討会の日程を決めて実施した。勤務の都合で参加できない者には、勉強会は録画して視聴を依頼し、事例検討会は内容を他のスタッフから伝えてもらってケアに参加してもらった。

### プログラムの評価

評価項目は、排泄ケアの知識、排泄ケアに対する態度、信念の3項目とした。

排泄ケアの知識は、勉強会・事例検討会で用いる高齢者排泄ケアマニュアルの項目に準じて、研究者が独自に作成した。排泄日誌に必要な情報とその情報に基づく排尿・排便アセスメントとケアにおける最も重要な10項目を精選し作成した。各項目について、「とてもそう思う(4点)」から「全くそう思わない(1点)」の4件法で質問した。

排泄ケアの態度は、排泄ケアに対する思考や自身の行動指針 (Anika et al., 2021; 中井, 2023) として捉え、独自に5項目を作成した。とてもそう思う(4点)から全くそう思わない(1点)の4件法で問い、得点が高いほど排泄ケアに対して肯定的な態度を持ち合わせているものとした。

排泄ケアの信念は、排泄ケアへの期待 (Anika et al., 2021) として捉え、独自に5項目を作成した。とてもそう思う(4点)から全くそう思わない(1点)の4件法で問う。得点が高いほど、より快適な排泄ケアを提供したいとする信念を持ち合わせているものとする。

また、排泄ケアに関する自身の考えや、本教育プログラムに対する意見等を自由記述で記載するよう依頼した。

調査は、無記名自記式調査用紙を用いて、基本属性・評価項目を調査した。教育プログラム開始前、勉強会終了時、事例検討会3回がすべて終了時、プログラム終了後1か月、プログラム終了後3か月で実施した。ただし、属性は教育プログラム実施前のみとした。

各時期の調査項目を対応のある一元配置分散分析を行い、有意差が認められた場合には多重比較を実施する。取り組み事例の排泄課題の解決状況、取り組んだ内容を整理して、調査項目の結果を解釈する際に活用した。

## 4. 研究成果

### (1) 教育プログラムの実施結果

A 特養の2つのユニット介護職を対象に教育プログラムを実施した。

それぞれの教育プログラム実施内容と事例検討の対象となった高齢者の変化については以下のとおりである。2つのユニットをグループAとグループBとして示した。

#### グループA

グループAは、「頻尿を訴える認知症高齢者の事例」に取り組んだ。対象事例は、重度の認知症であるが自分で動くことはできるため、日中頻回に立ち上がりが見られ、そのたびにトイレ誘導を行うが排尿はほとんどなかった。夕方から夜間にかけて大量の排尿が見られ、パットをはずなどの行動が見られていた。勉強会は基礎的な知識の中でも、特に事例に関連する頻尿のアセスメントの方法と頻尿が改善した事例の取り組みを紹介した。事例検討会を通じて、対象高齢者の下部尿路機能には問題がないこと、日中の排尿が少なく、夜間の尿量が増えることは高齢で心機能の低下した高齢者ではやむを得ないことであることを伝えていった。そして、対象高齢者の日中の尿量自体は少なく、対象高齢者の立ち上がる行動を尿意とスタッフが解釈していることが、頻回なトイレ誘導につながっていることが明らかになった。これまでのおむつ外しの経験から落ち着かない時はトイレ誘導という対応を習慣的に行っていたことに気づく機会となった。そのため、対象高齢者の生活のリズムを整えたり、内服薬を調整したりすることで、夜間よく寝れること、日中落ち着いて過ごせることを目標に援助する方向でケア計画を立て実践した。その結果、トイレに行く回数は軽減し、日中、夜間も穏やかに過ごすことが多くなっていった。

#### グループB

グループBは、「軟便を少しずつ頻回に排便している事例」に取り組んだ。対象事例は、自分で便意を感じてトイレに行くが柔らかい便が少量ずつ排出され、頻回に便意があるにも関わらず便がでないこと不快と感じていた。勉強会では基礎的な知識の中でも、特に事例に関連する排便のアセスメントの方法と下剤調整に関する知識について説明し、類似した事例を紹介をした。事例検討会において、便の形状を整えるための下剤調整と便量を増やすための食物繊維の摂取を開始し、排便日誌で便形状や量を評価した。食物繊維の摂取による便量の変化はなく、食物繊維の摂取は中止した。事例検討を重ね3か月が経過する頃には、下剤の減量によって、便の形状は、普通便(プリストルスケール4~5)が排出されることが多くなり、対象高齢者自身は便が出やすくなったと満足していた。もう少しまとまって便が排出できるよう引き続き、下剤の調整に取り組んでみるということで、事例検討会は終了した。

## (2) 教育プログラムの評価結果

教育プログラムに参加した各ユニット 6 名計 12 名のうち、評価の調査に回答した者 11 名であったが、すべての調査項目に回答があった 8 名の回答を分析対象とした。

8 名の結果と、グループ A、B 別に集計した結果を表 1 に示した。全体のプログラム前、勉強会后、事例検討会後の態度、信念、知識の得点を比較したところ、知識に関してのみ、有意な変化が認められ、介入前に比べて、勉強会后、事例検討会後に高い得点を示した。

表 1 プログラム実施前後の態度・信念・知識得点の変化

		全体(n=8)		グループ A(n=5)		グループ B(n=3)	
		平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
態度	介入前	15.0	2.7	13.8	1.1	17.0	3.6
	勉強会后	15.3	2.8	13.8	1.3	17.7	3.2
	事例検討会後	15.3	2.7	14.4	1.3	16.7	4.0
信念	介入前	14.3	0.9	14.2	0.8	14.3	1.2
	勉強会后	15.0	1.2	15.0	0.7	15.0	2.0
	事例検討会後	15.0	2.1	15.6	1.8	14.0	2.6
知識	介入前	22.9	6.4	20.4	6.3	27.0	4.6
	勉強会后	29.9	3.8	28.6	1.3	32.0	6.1
	事例検討会後	28.5	3.7	27.4	3.1	30.3	4.5

\*  $p < 0.05$

## (3) 考察

本研究では、知識提供の勉強会だけでなく事例検討会を実施し、高齢者の排泄状態が改善することで、排泄ケアに関する積極的な態度や信念が形成されるのではないかと考えた。しかし事例検討会を含む教育プログラムの実践後に、態度や信念の変化は認められなかった。今回の事例検討会では、各ユニットの介護職が自ら問題を感じ、改善したいと考える事例を対象とした。そのため、グループ A のユニットでは、排泄自体の改善というよりは、認知症高齢者の生活リズムの改善に視点を置かざるを得なかった。このように、対象者自身が事例を選定することで、取り組みへの動機は高まった一方で、排泄ケアの効果を実感できる事例とはなりづらかったことが推察される。また、グループ B においては、自由記述には、「実際に時間をかけて行って改善が見られ、Y 様も喜んでおられ、本当に良かったと思います。形のある便になりましたが、もう少し 1 回の排便量が増えればなお良いなと思いました。」と記載されており、対象高齢者自身が成果を実感し介護職に伝えてくれることや排出される便の形状の改善から、達成感を感じた一方でもう少し効果が上がることを期待する声も聴かれた。排泄ケアに関する態度や信念を変化させるには、もう少し長期的に関わらなくてはいい事例であったと考える。これらのことから、排泄ケアの態度・信念を向上させるためには、取り組み事例の選択にさらなる吟味が必要であると考えた。

一方で、排泄ケアの知識に関する得点は高くなり、3 か月後事例検討会終了後も維持されていた。知識の改善は、勉強会の直後にみられ、事例検討会後の 3 か月経過後も維持されていた。勉強会での知識提供は、対象者自身が取り組みたい事例に即した内容であったことから、学修への動機づけが高かったことが予測される。さらに、事例検討会の中で繰り返し知識を活用したり、排泄日誌を読み込んだりしていたことが、知識の維持につながったと考える。

以上のことから、事例検討会を活用した教育プログラムは、知識の定着に役立つことが明らかになったが、より積極的な排泄ケアの態度・信念の形成には、課題があることが明らかになった。今後の課題として、今回の研究は、対象者が少なくさらにデータを収集していく必要がある。また、教育プログラムの効果を測定する項目の妥当性、信頼性の検証、教育プログラムとして実施する事例検討会において取り組む事例を設定する方法について、さらに検討が必要である。

## 引用文献

- ・ Anika janese van Vuuren, J.A. van Rensburg, Lonese Jacobs, et al. (2021): Exploring literature on knowledge, attitudes, beliefs and practices towards urinary incontinence management: a scoping review, International Urogynecology Journal, 32, 485-499
- ・ 中井俊樹 . (2023): 第 2 版 看護現場で使える教育学の理論と技法, メディカ出版, 東京 .

- Rahaman AN et.al (2012):Distance coursework and coaching to improve nursing home incontinence care:lessons learned.Journal of The American Society,Vol60(6),1157-1164.
- Sunah P et.al (2015) :Knowledge, Attitudes, and Practices in registered nursing and care aids about urinary incontinence in Korean. Journal of Wound, Ostomy & Continence Nursing,42(2),183-189.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 濱田良子、陶山啓子、小岡亜希子、藤井晶子	4. 巻 第26巻2号
2. 論文標題 回復期リハビリテーション病棟における看護職の高齢者排尿ケアの実践に関連する要因	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 老年看護学	6. 最初と最後の頁 54-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Akiko Kooka, Maki Kato <sup>2</sup> , Keiko Suyama, Sachiko Hara
2. 発表標題 Factors Influencing Comfortable Defecation Care for Older Adults in Integrated Medical and Long-term Care Facilities
3. 学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars 2024
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 久美子 (Tanaka Kumiko) (00342296)	愛媛大学・医学系研究科・准教授  (16301)	
研究分担者	中村 五月 (Nakamura Sathuki) (40549317)	聖カタリナ大学・人間健康福祉学部・准教授  (36302)	
研究分担者	小岡 亜希子 (Kooka Akiko) (50444758)	愛媛大学・医学系研究科・講師  (16301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤井 晶子  (Fuji Akiko)  (00805624)	愛媛大学・医学系研究科・助教    (16301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関